令和４年度奈良県総合教育会議　＝議事概要＝

日時：令和４年１２月２１日
場所：奈良経済会館　５階　大会議室

〇荒井知事

第２期奈良県教育振興大綱の推進、教育ジャーナル、奈良女子大学での講義内容、（仮称）奈良県立工科大学の設置構想について、議論いただき、お知恵を賜りたい。

〇文化・教育・くらし創造部　教育振興課　小西課長

＜資料１　第２期教育振興大綱に基づく施策及び評価指標について＞

・令和３年度の奈良県総合教育会議において、第2期教育振興大綱の進捗を測っていくための評価指標について議論いただき、決定をいただいた。資料の１ページは、KPIに基づき、令和３年度の進捗状況を整理したものである。右側の欄、指標及び目標が、前回整理をしていただいた指標の一覧である。

・実際の進捗は、資料の２ページ目を見ていただきたい。5つのテーマに関して23の指標設定をした。それぞれの進捗状況等については、青色が、目標を達成している項目となっている。緑色の部分は目標達成には至っていないが、目標達成に近づいている指標である。オレンジ色の部分は、目標値との差が拡大している項目である。灰色の部分は、目標達成ができておらず、かつ、昨年度は指標をとっていなかったため、前年度との比較ができない指標である。5本の柱ごとに、施策の状況について分析した内容が資料の3ページ以降である。

・１つ目の柱は、「こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ」という項目である。3ページ以降の資料の構成は、左側の部分は、県として行っている施策の一覧である。施策へのアプローチの仕方ごとに類型として整理をした。「人材育成、質の向上」「体制整備支援」「普及啓発」の3類型である。取組によっては、そのアプローチに偏りがあることなどが見えてくる。もう１つのポイントとして、それぞれの施策について、どの世代をターゲットとして行っているのかという事を可視化している。世代に大きな偏りがないか、整理をしてみた。

・「こころと身体を子どもの成長に合わせてはぐくむ」施策には、「就学前教育の充実」と「こころと身体をはぐくむ」という2つの観点がある。それぞれについて類型で見るとバランスよく取組を実施できていることがわかる。世代別に見ると「就学前教育」は幼児期に偏っているが、「こころと身体のはぐくみ」は、世代に応じて、先の世代まで続けていくような取組も見られる。

・施策の評価指標の分析は、評価指標のうち、しっかり達成している指標、もしくは差が拡大している指標に注目して挙げている。体力に関しては、下がってきているという傾向が見える。新型コロナウイルス感染症の影響が大きいと分析している。課題としては、新型コロナウイルス感染症の影響についての取組、運動する子としない子の二極化についての取組である。

・目標達成に向けた取組としては、特に就学前教育については、市町村アドバイザーなど、核となる人材を育成する取組を新規で行っていきたい。体力に関しては、子どもたちの意欲を伸ばすような表彰や先生方に対する研修の充実に取り組んでいきたい。

・「学ぶ力、考える力、探求する力をはぐくむ」について、世代別類型を見ると幅広い世代に渡って支援を行っている。2の新たな教育のスタイルの中にあるICTの取組については、ICT環境の整備自体は施策としてしっかり行われている。人材育成や質の向上がこれからの課題である。
・目標との差が拡大している指標について、ICT環境の整備は進んでいるが、情報活用の基盤となる知識や態度について、子どもたちが「できる・ややできる」と回答した割合が少し減少している。その点については情報活用の基盤となる知識の範囲が、広がっていることによると分析している。
・課題として、部活動の地域移行に関して、モデル事業により、その有用性や改善点を見つけていくことが必要である。また、ICTについては教職員の指導力向上がさらに必要である。
・目標達成に向けた取組については、新規に、県立高校モデル校に部活動指導員の配置をしている。
・3つ目の柱、「働く意欲と働く力をはぐくむ」については、世代別に見ると、より社会に近い高校生世代に対して集中的に施策を打っている。この世代に対して地域で様々な職業選択ができる取組も、実施していきたい。施策類型で見ると人材育成・質の向上について手厚く施策を打っているということがわかる。一方で普及啓発の施策がないということも見える。
・目標との差が拡大している指標では、インターンシップに参加する生徒の割合が下がってきている。これは新型コロナウイルス感染症の関係で、受け入れ側と学校側の両方がなかなか取り組めない状況だったと思われる。
・今後に向けた取組や課題認識としては、コロナ禍においても、どういう形であれば子どもたちに職業体験などを実施できるのか検討する必要がある。
・4つ目の「地域と協働して活躍する人を育てる」について、子どもたちが地域と触れ合って、郷土を理解する様々な取組を実施していくということと、地域社会の幅広い世代に対しての取組をしっかりと実施していくというところが、肝になっている。
・1つ目の「地域を良くする力のはぐくみ」では、幼・小・中・高を中心に地域を理解する、また地域に対する愛着心を形成する取組を行っている。施策類型で見ると人材育成・質の向上について手厚く、体制整備支援、普及啓発については、もう少し改善の必要がある。
・2つ目の「地域を楽しむためのはぐくみ」についてはムジークフェストやスポーツイベントなど様々に取り組んでおり、全世代に対してしっかり響いている。
・目標との差が拡大している指標について、学校において地域と協力する取組を実施しているものの、まちづくりのための活動行動者率は、少し低くなっている。これもコロナ禍における行動様式の変化により外に出にくく、新しいネットワークを開発しにくいためと考える。
・課題として、全国学力・学習状況調査から、地域の行事に参加する生徒の割合が減少していることがある。ふるさとの奈良に誇りや愛着を持てるような教育内容の充実について議論が必要である。
・目標達成に向けた取組として新規に次世代地域リーダー育成事業を立ち上げた。また、地域課題の解決に向けた研究のカリキュラム改革や、その課題に応じたフィールドワーク、公開講座やその発表の機会の確保などを行う事業を立ち上げた。今後も検証していきたい。
・最後の「地域で個性が輝く環境と仕組みをつくる」について、第１にいじめ防止対策を掲げている。これは小・中・高のどの世代においても避けては通れない課題である。様々な人的な体制の整備、議論の場の立ち上げやカウンセラーの配置などを行っている。
・不登校・引きこもり対策について、長期化する傾向にあるので、学校教育の段階だけでなく、その先の青

年期、社会人の世代に至るまで、息の長い支援体制が必要である。幅広い世代に対して、支援が必要な方たちに対する支援や、体制の整備を中心に取り組んでいる。施策類型については、体制整備を中心に行っていることが表れている。

・評価指標では、いずれの項目も達成している。ただ昨年、この場でご意見をいただいたように、達成できていればもう良いということではない。取り組んでいるからこそ新たな課題も出てくるので、安心することなく、しっかり議論を続けていきたい。

・いじめに関しては令和 3 年度から新たに 12 月をいじめ防止強化月間に定め、いじめのアンケートの実施、いじめ防止組織会議を集中的に実施していくことで目標達成できた。当課は、私学を所管しており、最近私学の教頭先生を集めた研修会を行った。いじめの重大事態の発生に対して、現場で対応された方をお呼びして、いじめはどこで起こってもおかしくないということをしっかりと伝えていただいた。その時には、いかに初期対応が大切かということを学んでいただくことができた。これからも、県として、このような取組を地道に進めていきたい。

・目標達成に向けた取組については、奈良県いじめ防止基本方針の趣旨を引き続き徹底していくということが大事である。やはり現場の先生方の認知する感度を上げていくことも大事なので、先ほど申し上げたような研修もしっかりやっていきたい。

・不登校の児童生徒に対しては、デジタル化が進んでいるので、オンライン等を活用した学習支援を引き続き実施していく。

〇吉田教育長

<資料2 教育ジャーナルについて>

・発刊の目的は、県の施策や学校の教育活動について家庭や地域に発信し、連携を深めることである。年間 2 回定期的に発刊し、発刊部数は 1 万 3000 部を予定している。創刊号の内容は、表紙には児童生徒の学習活動の様子を載せ、知事と松本顧問に大綱や教育に対する思いをテーマに対談していただき、特集ページを組むことと、私の教育に対する考え方も載せる予定である。

・学校紹介ページとして1つは、王寺町の記事を載せる。王寺町では、令和 4 年度に小学校 3 校と中学校 2 校を再編成し、2つの義務教育学校をつくった。施設一体型の王寺北義務教育学校と施設分離型の王寺南義務教育学校である。学年制は、6・3 制を 4・3・2 制にして、従来の小学校 5、6 年から一部教科担任制を導入している。

・学校紹介ページで、もう1校、新たに設立された奈良県立大学附属高等学校の取組を紹介したい。普通科ではなく探究科の単科高校で、全体の教科学習も含めて、探究的な活動を取り入れた特色ある学校である。裏表紙には、イベント等のお知らせ、問い合わせ先を記載し、スケジュールとしては 2 月発刊予定で進めて参りたい。

〇荒井知事

<当日配布資料：（仮称）奈良県立工科大学の設置構想について>

・県立工科大学の設置構想について、資料の左にあるように、令和 8 年に大学院を先行設置するという予定である。三宅町にキャンパスが完成した時に学部を併設する。研究と教育の両方ができる大学としてのポイントは、教員の活躍できる環境整備である。

・研究機関、企業や他の大学との副業、兼業を認める。ベーシックな給料やステータスはこの大学院で受け、研究所の兼任ができる。各教員の年俸は随分変わってきているし、変わっても当然だという風土にしていく。それから定年を高めに設定する。いろいろな組織を退職された方の受け皿になる。高齢でも活躍できる年代を放っておくのはもったいない。
・もう一つはスタートアップヴィレッジということにもなるが、知的交流空間の整備ということである。昨日、京都大学で工学を究められた小寺先生に新しい県立工科大学の学長候補になっていただくことをご承諾いただき発表させていただいた。その際、建学の精神を中期目標という形で定めるように話をさせていただいた。
・ウェブで参加されていたスタンフォード大学の池野先生がスタートアップヴィレッジは大事だとおっしゃっていた。田園都市構想の一環として、レストランと宿泊施設を作り、交流できる空間を作ったらどうかということだった。
・大学のキャンパスは、まちづくりと一緒にしなくてはならない。この地域では、就学前教育も一元化して行政がもっと力入れてやろうという動きが出ている。

〇荒井知事

＜資料なし＞

・以前に職員が自死をされて、それは超過勤務が原因だったという判決が出た。県では、労働衛生環境条例を作り、この２月に上程しようと思っている。条例の中には、厳密な時間管理ということがある。特にメンタルな健康管理も必要だ。職場のストレスをどう解消するかということである。
・働きがいをつくることについて、来年度予算で県庁の留学制度を作ろうかと考えている。また、交流が活発にできるような発想も出ている。
・職場が雑然としているとストレスは自然と溜まってしまう。そこで、建築家の隈研吾さんに助言いただきオフィス環境を良くしようと計画している。デジタルツールを利用することなども条例で規定し、実行基本計画を作っていく。このような条例が教員の職場にも適用できるかどうかというのは次の検討課題である。この総合教育会議で、また話題にしていただければと思う。

〇荒井知事

＜資料3 「これからの教育は何を目指すべきか」を考える（知事特別講義）＞

（12 月 19 日に、奈良女子大学と奈良教育大学の学生に対して知事が講義した資料）

・これまでの教育は、富国強兵、和魂洋才、戦争への反省と時代によって変わってきている。文科省の「指導・助言・援助」が行われてきた戦後のこれまでの教育が行き詰まっているのではないかという問題設定から始まっている。江戸時代・明治時代・戦後・これからという4つの時代区分で振り返った。
・これまでの教育が生み出したものは、よくできる子と良い子である。つまり、垂直的序列化と水平的序列化である。出世する能力や同調性を養ってきたが、これからは水平的多様性である。
・この国の教育理念の内容は極めて曖昧だ。先生方はそういう議論をする余裕もなく、日々疲れておられる。しかし教育はとても大事だ。
・３ページのテーマは「教育の意味は？」である。教育の対象は「ヒト」である。生まれてから、教育する期間があるのは「ヒト」だけだ。人を教育する意味の根幹には、本人の教育、群れの維持などがある。脳の大

脳皮質のうち新皮質に働きかけるのが教育である。

・そのような教育は、何のために行われるかということは、奈良県では教育振興大綱に「本人のための教育」と定義した。その本人のための教育は、自分との対話を通じて、自分は何者かを知るということを生む。さらに、自己はどうありたいかということを考えてもらうための促しができる。そうすると、内側から学びへの志が生まれて、一人一人が成長して国のためになる。

・グローバル化が進む社会を生きるためには、多様性が必要。その多様性とは、自分と他者をともに尊重する姿勢である。同調ではなく共感力を育む必要がある。

・高校時代に奈良女子大学学長が「良き人生をおくるには、人に好かれる人になれ」と言われた。「好かれるために生きていかないと」と思い込んでいたが、留学中にアメリカの友人から、「お前は人に好かれようとしすぎだ。自分らしく生きろ。」と言われた。それから、自分らしく生きてきた。

・多様な創造的人材を育む教育現場は、多様なもので能力を押さえ込まないようにしないといけない。学校では、多様性が認められていても、社会で認められにくいこともある。多様性を受け入れる社会も作らなければならない。これは奈良県教育振興大綱の精神に提示したので、地域ではある程度、実践できるかもしれない。

・学ぶ力が大事である。学びとは、「知る」「理解する」「考える」「疑問を発する」の 4 段階である。さらに、「楽しさ」があれば学び続けられる。

・他者を意識をしないと、学ぶ力は育めない。教員も学ぶものとして対話に参加する。江戸時代から言っている先生がいるが、「自分の考えを伝える」ことが大切。

・生きる力とは、自分と他者を大切にしながら、他者とコミュニケーションする力である。それを子どもの頃から養うことが大切。神経・筋肉の発達、ミエリネーション、自尊心、利他心の発達は子ども同士の関わりで育まれていく。奈良県ではそれを実行しようと、教育振興大綱の様々な部分にこのような思想が表れている。

・他者との良い関係をつくるには、まず他者がいるという認識と、コミュニケーション力が必要。多様性を包摂するコミュニティーを作るリーダーシップの育成も大切である。

・歴史を振り返ると、江戸時代の教育は身分制のもとでの職分教育である。儒教、神道、仏教が混在しながら、教育されていた。

・12 ページ目にある 4 人の思想家を紹介する。京都の町人の子である伊藤仁斎は、勉強好きで、精神的に不調になってしまったがそれを脱却して、他者性を認識した。荻生徂徠は、朱子学に批判的で、人の多様性を説いた。佐藤一斎は、「自己の心に従う」という思想、横井小楠は、開明的な方である。

・明治時代には、帝国憲法の公布と教育勅語が出された。これは井上毅が、儒学に基づく「忠と孝」の形式で、戦後まで続いた。

・それに対して福沢諭吉は、「人は、生まれながらの貴賤貧富の差はないけれど学問を勤めて物事をよく知る人は、貴人となり無学な人は貧人となる」と、儒教を批判したと言われている。

・ともに、国家を強くするという考えで、学問のすすめで福沢諭吉が言った自主独立の精神は、むしろ今、生きてくる気がする。

・教育システムは、終戦で転換したが、文部省は解体されず教育委員会が生まれた。それを隠れみのにして国の上意下達の教育制度ができたという考えが通説になっている。本来の教育はどのようにあるべきか、「指導・助言・勧告」の行政制度をどう脱却できるかという問題意識を持って考えなくてはならない。

・教育部門と一般行政部門、どのようにつき合うのか。今日、教育委員会は義務教育中心で、就学前教育や私学には理念や進め方にばらつきが生まれがちである。県の知事部局の教育振興課長がいろいろな調整を担っている。
・総合教育会議は、そのような位置付けである。教育振興大綱を知事部局で策定しこの会議で自由に意見を伺いながら、修正した。
・県では、市町村長と市町村教育長が参加する教育サミットを開催している。アイランド形式でグループ協議をすると、有意義な議論ができる。教育振興大綱を軸にして、地方の教育方針が規定できるようになった。教育振興大綱の概要も紹介した。
・職業選択に関して、NAFIC（なら食と農の魅力創造国際大学校）、フォレスターアカデミー、（仮称）県立工科大学などは、実学を重視し、机上の学を実にしていきたいと思っている。スタートアップヴィレッジの目標である。
・最後に、これからの社会においては、教育は何を目指すべきか、教育の仕組みや方法はどう変わっていくべきか、本日の議論の元になると思う。
・江戸時代の教育は身分に応じた教育であった。四民平等になった後の教育は、富国強兵の考えだった。そして今、多様性を認めるグローバル化の時代の中で、包摂を可能にする教育は、教育と社会の両方が変わらなくてはならない。そして、よくできる子、良い子を育てるという教育目標を脱して、個性豊かで伸び伸びと活躍できる水平的多様化をどのように達成するのかということは、教育の大きな課題になっている。こころを通わせるには、他者と繋がりを持つコミュニケーションを小さい頃からはぐくまないといけない。「学びと働く」を地域でうまく接続することができたら、社会の中で生きがいを求めることができ、地域での職業選択が何度でも叶うようにする。シングルマザーが再就職できるようなシングルマザービレッジを作ろうかと考えている。学力重視から実学重視、インターン重視の教育に踏み替える。スイスの高等学校では 5 日間の授業の 3.5 日はインターンで外に出ていく授業をして、働くことと自然と結びつくようにしている。今日の議論と関係するので、多少参考にしていただければと思う。

〇谷口顧問

・教育振興大綱の評価指数を見ると、全般的にコロナ禍での影響がかなり出ている中で、よくやっておられると思う。ICTの関係では、先生方に対する教育も大事だが、小学生の低学年などは、上級生から教えてもらった方が早い。高等専門学校では、その地域の近くの学校に頼まれれば、すぐに行って教える取組をしている。その方が、子どもたちも興味を持つ。
・知事が言われたことを具体的にどうやるかが問題。職員の留学制度は具体的で良い。多様性をどのように養うかということが、一番大事だ。私の子は中学校から高校の時に、学校にうまく馴染めなかったこともあり、大学の時に留学させた。アメリカで受け入れてくださった家の方も自分の子と同じように対応してくれた。要するに、いろいろな人がいるということを外国で初めて認識できて、元気になった。奈良は、日本で最初の国際都市だから、そのようなチャンスは多くある。子どもたちに、いろいろな人たちがいて、いろいろな考え方があるということが実感を持ってわかるような機会をぜひ作ってやって欲しい。横井小楠も私の子と同じような経験をしている。どうやって具体的に実践できるかということを議論していただいて、少しでも良い方法があればやっていくという形をとられると非常に良い。

〇荒井知事

・今、奈良で始めていることは、絵を描かせるという発想。絵を描いた時に、「これどういうつもりで描いたの。面白いね。」と褒める。天理のなら歴史芸術文化村でやっている。他者性の認識は、5 歳ぐらいまでにできるので、その間でしないといけない。

・奈良県立大学附属高等学校を見学したが、教室の雰囲気が新しいと思った。あるテーマについての意見交流では、一見変わった意見を言う生徒もいたが、周囲は平然と受け入れ、先生は主導的でなく、さらに意見を促していた。自由に自分の思いや考えを伝えることが奨励されている。先生は、ファシリテーターの役割だった。受験校では、画一教育になりがちなので、その辺りは課題だ。

〇谷口顧問

・他者に説明すると、自分も理解ができる。発言することを大事にする学校の取組は良いと思う。

〇伊藤 忠通委員

・教育振興大綱について、5つのテーマのうち一番大事なのは、「学ぶ力、考える力、探究する力をはぐくむ」ことである。それらの力は、どのように身につくのか。今までの知識注入型の教育ではなく、自ら主体的に参加していく、つまり学びの経験の仕方が大切。創造的な活動に参加してみる、学び合いを経験する、発見する喜びを得る、わかることと伝わることのギャップを認識する、などが大切だ。その経験から、他者との違いが見えてくる。そのような学びの経験があると、達成感や手応えを感じることができ、成長していく。自己肯定感が上がり、自尊感情も育まれる。学び合いの中で、対話的な学びを実践すれば、人との違いを受け入れる寛容性も育まれる。

・施策の方針にある新たな教育のスタイルについては、教員の学び方の改革も必要。教員自身も学習者であり表現者である。知事もおっしゃっていたが、ファシリテーターであると思う。それを踏まえて教員の働き方改革を考える。事務的な作業部分は、できるだけ省いて教師本来の役割を果たすように、環境を整備していくことが必要だ。

〇荒井知事

・今まで学校での学びは試験に受かる能力をつけることとなっていた。良い学校に入り出世し高い給料をもらうことが良いとされている。それだけではなく、モチベーションが上がるように社会と教育が結びつけば良い。社会のそのような風潮と教育とがマッチすれば、地域でうまくいく機運が醸成できる。それが奈良県の願いだ。実学で稼ぐ力、生きる力は、学力とは関係ないという世の中になってくると良い。

〇田中委員

・私も「学ぶ力、考える力、探究する力」が気になる。自分の思っていることを自分の意見として言い切れない。思っていることを人に言えないということは課題だ。何もないところから、こうしていきたいと俯瞰的に見ることのできる主体性をもった人を育てていただきたい。そのためにどんな教育をしたら良いのか。ある冊子に「自分で考えることができる子になってほしい」と先生の願いが書かれていた。その記事には、小さい時から親が指示していると、手間がかからないが、そのような子は、かえって自立が遅れてしまうと書かれていた。

・授業の中では、同調してくれる意見より疑問を投げかけられるような意見があった方が良い。それに対して自分で考えるので、力がつく。チャレンジして失敗してもそこから学ぶこともある。チャレンジして成功すれば、自己肯定もできる。

〇上野委員

・私は文化財を守る立場にいるので、その視点から教育振興大綱の 4 つ目のテーマ「地域と協働して活躍する人を育てる」について述べる。課題として、地域の行事に参加する生徒が減っていることを非常に残念に思う。奈良県は、国宝数が全国 3 位で、200 件ある。全国に大体 1000 件ほど国宝があり、1 位は東京、2 位が京都。文化財建造物としては、確か奈良県は全国でも上位だった。小学生、中学生に、こんなに文化財に恵まれている場所に住んでいることを伝えていただきたい。

・重要なことは、文化財を守っていくこと。体験プログラムなどの企画により文化財の修復に携わる技術者を県内で育成していただきたい。自分が住む県の文化財を、県出身の者が修復することは理想の形だ。

・5 番目のテーマのいじめ問題、不登校、ひきこもりについて、どれも悩ましい問題だ。最近はネットの普及によりネットを使ったいじめも増えている。この点では、報告にもあったように、進捗状況として、全ての項目で目標達成している。しかし、現状維持し、さらに取り組んでいただきたい。

〇三住委員

・「こころと身体をはぐくむ」のテーマの「自己肯定感と他者への寛容な心」について述べたい。自己肯定感は、客観的で社会的なものである。最初の社会は、母が子どもを大事に育てて肯定するということ。小学校でも、学校の先生が自分の教室の子どもを育んでいる。「はぐくむ」という言葉は、「育てる」という意味と「羽でくるむ」という意味がある。「羽でくるむ」は、包んであげる、守るという意味だ。教育振興大綱には、平仮名で書かれているので、両方を含んだ意味で使っておられると思う。先生がどんな子も全てはぐくむという発想を持つと、子どもは、自分は教室で存在してもいいんだと自己肯定感が生まれる。自己肯定感は、客観的にその人を肯定することで育つ。

・いろいろな事件があるが、社会の中で自己肯定感のない人が復讐という形で事件を起こしている場合もある。だから、全ての人が何らかの形で社会で承認され、存在を認められる社会が必要である。

・自信と自己肯定感は違う。成功体験を積んでできることが増えると自信がつく。自尊心を持てば、他者も尊重できる。

・「寛容なこころをはぐくむ」ことについて、ネット社会などは不寛容な現状で、寛容な心を育てることは難しい。他者への寛容な心は、自己肯定感があり、かつ人の悲しみや痛みに共感できて初めて、生まれる高度な精神である。

〇荒井知事

・県では、罪を犯した人を教育して更生する条例を作り、実行している。自己肯定感がはぐくまれるように地域で取り組んでいる。

・アンガーマネジメントが大切だ。怒りの感情を押さえ込まないでうまく処理し、伝えることが重要だ。

〇伊藤 美奈子委員

・知事に大学で講演をしていただき感謝する。知事の話を聞き、教育はすべての根底にあるので、大切にして欲しいと改めて思った。
・大綱の中にあるように、就学前の人間関係や経験が大切である。自己肯定感は、小学生は高いが、中学、高校と下がっていく。思春期になると人と比べられたり、評価されたりする経験が増えるからである。また、自分の希望や理想に今の自分は届かないと感じると、自己肯定感が下がる。
・最近、生徒指導提要が新しくなったが、不登校の問題にどういう支援が必要なのかということは、教育の中でしっかりと考えていかないといけないテーマである。不登校を未然防止するために、学校が安全で安心できる場所になるように取り組み、不登校を早期に発見し、しっかりとその子の状態をアセスメントすることが重要である。今、研究者としてアセスメントができるアンケートを作成しているところ。先生方の直感も大事だが、子どもが先生に見せない部分や先生が見過ごしている部分をアンケートなどのツールを使い、把握しながら、子どもを見ていくと良い。

〇荒井知事
・いろいろな場面で褒められるという教室社会ができたらいい。人と違う考え方を褒めるなど、人と違う面を褒めるということが、自己肯定に繋がる。

〇松本顧問
・ITが普及し、知識はインターネットで調べれば出てくるが、調べる知識はやはり学校で教え込まれた知識がベースになる。
・教員の学習会はあるが、親同士の勉強会があまりない。教育には、未知の段階があるので、親も勉強しないといけない。親も自分が経験したことがない不満や希望などを意見交換できる場所を県がリードして提供すると良い。子どもにとれば、お母さんやお父さんが社会。それを見ながら、断片的に学んでいる。
・親と教員が話し合った際、不安が生じる場合がある。教員側は、受けとめて改善しようとするが、そういう対立構造の議論ではなく、子どものために前向きに議論できる場が必要。

〇吉田教育長
・他者が自分を認めてくれるという空気がないと、なかなか自分らしさを出せない。子どもが自分らしさを出せる学校づくりとは、お互いを認め合うということになる。
・我々は自主性、自発性、主体性を混同して使っている。主体性のある子どもの教育を今しっかり行わなければならない。課題解決学習、プロジェクト学習を着実に推進していくと、主体的な子どもが育っていくということを改めて認識した。

〇荒井知事
・松本先生がおっしゃったデジタル化社会をどう作るかということは大きなテーマだ。DXの精神を発生させるために、統計や確率が、どのように関連しているのか。日本では、確率や統計が浸透していない。DXを教育でどう生かすかという課題もあるかと思う。いろいろと学ばせていただき、有意義だった。感謝申し上げる。